

“ともに生きること”を教え学ぶ人間関係原論の教育的試行

—人間関係科25期生の「地図にない旅」—

星野欣生（南山短期大学教授）

津村俊充（南山短期大学教授）

中野清（南山短期大学教授）

グラバア 俊子（南山短期大学教授）

川浦佐知子（南山短期大学講師）

人間関係原論は、「人間関係」の原論でもあり、「人間関係科」の原論でもある。人間関係科に入学した学生は、基本的には、その期の人間関係原論担当の教員4名と、2年間を共に歩み、学びを深めていくことになる。

この2年間の人間関係原論の歩みは、その年によって、一人ひとりの学生のニーズや状況、そして教員の期待や教員間の相互作用、ひいては学生と教員との相互作用により、さまざまに彩られた人間関係原論が創造されていくのである。

ここでは、人間関係科25期生と星野、津村、中野、グラバアが歩んだ道のりの記録をしておこうと思う。川浦は、1998年9月南山短大に赴任のため、25期生2年後期からの教員スタッフとしての仲間である。

25期生として、入学してきた学生は、120名であった。1年次前期の原論のテーマは『「人間関係」の原点をさぐる』ということであった。ねらいは、ほぼ2年間通して、柱となす、1. 124人のメンバーと出会う、2. わたしをいかす、相手をいかす、であった。「124人のメンバーと出会う」は、入学して間もない故のねらいでもあるが、時が経ち関係が深まる中、まさにお互いの学びの鏡になりうる真実の関係をめざした学習共同体としての仲間づくりを意識したねらいである。また、「わたしをいかす、相手をいかす」は、一人ひとりがしっかりと個性を発揮し、私の確立と尊重とは何かを明確にしながら、他者もまさに尊重されるべき大切な存在であるという、相反する問題に絶えず目を向けながら、思考し行動していく力を養うことをめざしたのである。

この2つが、25期生が歩んだ2年間のとても大きな、とても大切な、めざす道しるべになったのである。ただ、そこにはどちらに進めばよいか、見えない、「地図にない旅」の始まりでもあった。

1997年度（1年次）前期（表1参照）

第1回授業：5月1日

1997年4月23日から26日までの3泊4日のオープニング合宿を終えて、集まった25期生と教員3名（このときは、グラバアはブラジル出張のため原論の授業には顔を出さなかった）との人間関係原論の旅は以下のようなメッセージとともに始まった。

形のない宝物を探して 僕たちは旅に出ました
その時 持っていたのは 何にも書いてない一枚の地図です
何にも書いてないじゃ 見てもしょうがないな なんて言って
そんな地図のことも いつか忘れていました
でも ある時 僕たちが道に迷って どうしようもなくなった時のこと
です
誰かがふと思い出して その地図をなんとなく広げると
なんと 何にも書いてなかったはずのその地図に
くっきりと僕たちが歩いてきた道が その日のところまで
まるで初めから書いてあったように 浮き出ていました
もちろんこれからどっちへ行けばいいのか それは相変わらず教えてく
れません
でもその地図を見た時 みんなとても嬉しかったようです
そして 誰かが言いました
これからどこへ行こうか どっちに向って歩こうか
すると待っていたように 別の誰かが答えました
決まってるさ まだその地図にないところさ

授業プログラムとしては、集まった25期生と教員がおよそ3人組を作り、これからの人間関係科での学びの予感、「始まりの予感」を分かち合ったのである。

第2回授業：5月8日

ホリスティック医療活動の見学・研修のためブラジル出張をしていたグラバアが、サンバのリズムに合わせながら登場する。そして、ブラジルでの体験談、特にエイズ問題と取り組む日本人青年の話とブラジル人の生き方を巡っての話がさまざまなエピソードを交えながら興味深く語られる。学生は、奇抜な登場と興味深い話に引き込まれていったようである。

第3回授業：5月15日

津村が、人間関係科に赴任した際のここでの教育のユニークな視点と実践に

ついて、自らの体験談を中心に「つんつんの人関体験」というタイトルで話をした。それは、人間関係科の教育になかなかはじめなかった自分とその抵抗がまた新しい発見につながったこと、そしてそのような発見することは自らの力で学生につかんでいってほしいことを伝えた。

前日もそうだが、各回の終わりには「出会いタイム」という時間を設けて、学生がまだ知り合っていない者同士集まり、その日のプログラムの中で感じたこと考えたことなどを分かち合う時間を設けている。また、その後で、出会った仲間へのフィードバックを簡単なメッセージカードに書くことも行った。このメッセージを書くことは、学生の中には苦痛に感じるものもいたようであるが、前期、後期と各期の終わりにメッセージ交換をすることで、多くの人との出会いやみずからの道程を知る手がかりにもなったようで、最終的には学生にとって興味深いものとなっていったように思われる。

第4回授業：5月22日～第8回授業：6月26日

「私をいかす、相手をいかす」というタイトルで、ねらいとして「かかわりを楽しむ」を掲げ、スタッフの方から学生番号に従いグルーピングを機械的に行ったメンバーで5週間を過ごすことにした。ここでは、まさに人間関係の原点として、人と人が関わる体験をすること、それは願わくはかかわりを楽しむ体験であってほしいと考えたのである。と同時に、これまでの教育では、教員から学ぶべきものが与えられ、それを受動的に取り込んでいくだけの学習態度から、自らの関心で自らの力で何を学ぶか見つけ出し、それに取り組む能動的な学習態度の形成もねらったプログラム展開であった。

活動内容は、以下に示すように、まさにさまざまであった。ただ、自由を与えたその喜びに、ふわふわと時を過ごしたチームがあったり、グループの中での葛藤に直面しながらそれを乗り越え作品を発表したチームもあり、さまざまであった。そこで、あらため活動結果（コンテンツ）と活動している間に起こるさまざまな人間関係（プロセス）から学ぶことができるのが人間関係科であることを少しずつ組織していくことになったようである。

第9回授業：7月3日

「どのように、どのくらい私をいかせただろうか？また相手をいかせただろうか？」を手がかりに、「私をいかす、相手をいかす」をテーマにした5回のグループ体験のふりかえりを行った。そして、改めてプロセスを充実して生きたグループは、コンテンツに対しても満足感をもったり、ともにいかし合えたという実感をもったりしていることを話し合った。また、あまり充実感を得ず不燃焼で終わったグループは次回にはもっと頑張りたいとの報告もあった。

第10回授業：7月10日と第11回授業：7月17日

『関係の中の私—形の無い宝物をさがして—』というテーマで、これまでの出会いカードの交換とそれらのメッセージをいかしたこの前期歩んできた「My Map」づくりに取り組んだ。そして、前期の課題は、その「My Map」を作成して、① “私の歩いた道” ② “関係の中の私” “形の無い私の宝物” を語るレポート作成であった。

1997年度（1年次）後期（表2参照）

1年次後期の人間関係原論のねらいも前期と基本的には同じであったが、サブタイトルに『—学ぶこと、かかわること—』を掲げプログラムを作成した。

第1回授業：9月25日

大学生としての夏休みを初めて体験してから出会う仲間たちとの再会を意識してプログラムを作った。『夏の出会い』というテーマで、3人組を作り話し合った。そして、私の『夏の出会い』体験を124名の中から数名が語ってくれた。仲間からの夏のボランティア活動の体験や新鮮な体験を聞いたことは、学生相互に刺激的であったらう。

第2回授業：10月2日～第7回授業：11月6日

『学ぶの風景』と題して、体験から学ぶこと、かかわりから学ぶこと、出会いから学ぶことを、6週間のプログラムを通して考えた。それは、まず、「私の学びの風景」というテーマで中野の「出会い・かかわり・学び」の小講義を行った。そして、「私の出会いから」と題して、自らの出会い体験とそこからの影響や学びについて検討を試みる実習を行った。そして、1人になって自分自身の「出会いから学びへ」を文章化することを試みている。また、津村が翻訳したチェックリスト「学習スタイルのインベントリー」（1997. 津村）を用いて自らの学び方の検討も行った。

第8回授業：11月20日～第13回授業：1998年1月8日

6週間のプログラムとして、1年間の人間関係科での生活で体験したこと・学んだことを詩と曲に結晶化する作業を通して、学習者一人ひとりの人間関係論や人間関係科論を考察し、他者に伝えるという試みをした。作詞・作曲のための時間は実質3、4週と本当に短かったにもかかわらず、どのグループもかなりの力作ができ、年の終わりの「クリスマス・コンサート」と年の初めの「ニューイヤー・コンサート」は124人盛り上がり、楽しく一年の人間関係原論の幕を閉じることになった。

後期のレポート課題もやはり、出会いカードの交換とそれを用いた「My Map」づくりと①“私の歩いた道”、②“どのように自分、相手をいかしいかされたか?”、③“形のない私の宝物”、を語ることであった。

1998年度（2年次）前期（表3参照）

120名の学生が、さまざまな事情で112名になった。そして、原論の担当教員を合わせると116名である。ねらいとしては、やはり「116人のメンバーと出会う」、「わたしをいかす、相手をいかす」が継続されたが、2年次の学習のねらいとして、『私の中の社会』を探検する—《つながりのジレンマ、つながりの力》を求めて—と題して、自分の内的な世界への関心から外に向かう力がわき起こることをねらったプログラムの展開を試みた。

第1回授業：4月10日と第2回授業：4月17日

この2回の授業は、新1年生を人間関係科に迎え、新しい学習共同体づくりのための時間として「とにかくニンカン」PARTⅡとしたここ数年恒例のプログラムの実施をした。内容としては、新2年生から新1年生へ入学を祝うメッセージカードのプレゼント、教員も一緒に幾つかの出し物を企画したミニパーティを楽しんだのである。

第3回授業：5月1日～第9回授業：6月19日

《私の中の社会》を考えるテーマとして、自ら抱えているジレンマを探り、そのジレンマが現代の社会の中であって、どのようなものと関連し合っているのか、そして、私はどちらに向けて歩いていこうとするのか、等を検討する一連のプログラムを開発し実施した。それは、『私のジレンマをさぐる』→『私のジレンマを育てる』→『つながるジレンマ』→『ジレンマから立ち上がる』という流れで、自らのジレンマを一つの有機体のように見立てそれがどのようになどのどのようなものとつながっているのかを探ろうとしたのである。このテーマと手順はなかなか学生には難しかったようである。また、我々スタッフも、初めての試みの実習が多くまさに手探りの状態で新しいプログラムを開発したのである。特に、学生にとって、5月から6月にかけては、「就職活動」という現実のしんどい問題が目の前にあり、「ジレンマ」のテーマとしては「就職問題」が多くを占め、日頃考えていることをさらに授業中も考えることを要求されたような実感をもたせたようである。津村もそうした学生のプログラムへの理解と歩調を合わせるために自らも学生と同じようにプログラムを体験し、第9回目の授業では、以下のようなジレンマレポートの拙文を学生たちに紹介した。

このレポートを25期の皆さんの前で、読もうと思ったのは、せっかく書いたレポートだから皆に聞いてもらいたいという、私の自己顕示欲から生まれた行為であることが一つの大きな理由です。

もう一つは、25期生のみなさんの中に「私の中の社会」を探検する一〈つながりのジレンマ、つながりの力〉を求めて一のプログラムが余りにも意味がなかったと言い切る人がいること、・・・、先週レポートを読みあい、コメントを付けあった中でそれぞれにとっての意味を見い出している人がたくさんいることも知っているのですが、・・・あまりに「ジレンマ、もういや！」「何の意味もなかった！」と言い切る学生の声を聞くとプログラムを展開していった一人として少々寂しい思いがするので、私なりにこのプログラムへの一参加者として考えたことを披露してみようと思ったのが二つめの理由です。

人間にやってきて1年と半年近くが経とうとしている皆さんにスタッフの一人のメッセージが何か一つの正解を提供しようとしていることではないということはお分かりいただけると思います。ただ、皆さんに自分のジレンマを以前披露しただけに終わっている私のその後（プログラムを終えるにあつた）を少しでも理解していただければ幸いです。そして、さらには、皆さんに何か影響を与えることができるなら、もっと幸いです。

それでは、レポートを読みます。

私が取り上げたジレンマは、「これからの仕事」というテーマのもとで、一つは、このままの流れの中で仕事を続けていくのか？それとも、もう一つ、小さな、先のあまり見えない職場を求めて仕事をするのか？この二者択一の問題を取り上げた。

もう少し具体的に述べるなら、前者の選択肢は、今南山短期大学人間関係科で仕事をしているが、2000年4月には南山大学の新学部新学科に人間関係科は拡大発展することになっている。そして、南山大学という大きな大学のもとで現在の人間関係科は継続し、スタッフも新学科で仕事することになる。いわば、今の人間関係科は発展し大きな規模の職場が私の仕事場になるだろう。そうした規模の職場にも、これから様々な難問が持ち上がり解決していかねばならないだろうが、果たしてそうした安定志向でいいのだろうかという疑問が自分の中に沸き起こっているのも事実である。大学の教員、教授と呼ばれるのが自分としては、こそばゆい。そういう私は、もっと肉体労働的に、小さな規模の職場で汗水たらして働く自分がより自分らしいのではないかと思うことが多々ある。大きな組織の中にはまり込むよりは、小さな組織でそこにいるメンバーと顔を合わせながらワッセワッセと仕事をする喜びに満ちた道を選びたい気持ちが起こっているのである。

そこで、この問題をジレンマとして取り上げたのである。

他のスタッフから、新聞の切り抜きをたくさん頂いた。それをもらった時には、

なぜ、この人がこの記事をくれたのかほとんど分からなかった。そこで、ひとり一人から説明を聞くとそれぞれが私自身にとって、自分が取り上げた問題の視点を広げてもらえるものになった。

この時思ったことだが、なんて人は自分の見方や考え方で、新聞記事の内容を読み取っていくのだろう。相手は相手の枠組みで、私はあくまでも私の思いや気持ちで読み取ってしまおうとしているのである。このことを相互に話し合う中でよりはっきりしてきたことである。

次にもらった新聞記事を、分類する形で山分けしてみると、次のような島ができ上がった。

- (1) 小さな企業だからできる技術革新
- (2) ネットワークの時代となる
- (3) 端末は小さく軽く安くて繋がることで機能
- (4) 個々の単位をいかに有機的に繋ぐか？
- (5) 大企業も解体
- (6) 自分の期待通りにはいかない
- (7) 相手のニーズをいかに調査し、知りうるか？
- (8) いかに工夫し、コストパフォーマンスをあげられるか？
- (9) 人に守られて生きるか？人を守って生きる？
- (10) どんな人がいるか、見極める力
- (11) いつまでもトップであり続ける
- (12) 自分の思い通りに生きるためにも慎重な計算が必要
- (13) 安定志向の生き方→プライベートを大切にす
- (14) 体制側も動き出している

といった、島の名前を触手として付けてみた。そして、触手として、3つ選ぶように指示があったので、(1)～(5)までの触手を合わせて、『時代は大から小へ、小の主張と確立、そしてネットワーク化』、(9)～(13)までの触手を合わせて、『自分の生きざまを見せることを大切にすか VS 自分が生きることを大切にすか』、そして3つ目は(8)いかに工夫し、コストパフォーマンスをあげられるか？をそのまま3つ目の触手として取り上げた。

それでは、果たして、私の中の社会はどんな社会なのだろうか？どうもそんなに大きな広がりをもった社会を形成していないようである。いかに今を生きるか、目の前の問題に取り組むかといったことが、私自身の中に多くを占めているようである。ただ、この作業を通して、もう少し「小さくあること」の見直し、その確立の必要性を感じるようになったことと、あわせてそれらのネットワーク化の必要性も強く感じるようになった。それは、大きな組織の中でいかに小さな単位をつくり出し、それを有機的に結び付け機能するような力がかかなり大切になってきているようである。いかに小さな単位に対して信頼をつくり出し、それを繋ぐことができるか、

これはこれからの社会のあり方の大事な視点になっていきそうである。そして、このことはどちらの道を選び、進んでいくか分からないけれども、自分自身のこれからの仕事に向けての指針となるであろう。

今このレポートを読み直して、フッと思ったこと。それは、大きな組織を小さく小さく細分化し、小さな単位に切り刻んでいって残るは、一人の人間という単位、「私」の存在である。となると、結局この「私」がいかに信頼をつくり出し、他と繋がっていくかということがこの問題の核のような気がしてきた。そのつながりの先に組織、社会が見えてくるのかも知れない。もしくは、そのつながりそのものが社会なのかも知れない。

最後に、別の問題だが、私のジレンマを以前話した時、小さな組織で自分を生かす、自分の生きざまとして何がいいのか？などと話したことがあったと思う。私の中にある社会というレポートのテーマとは直接関連がないかもしれないが、「生きざまを見せる」もしくは、「生きざま」という言葉を使った時に、私の中には「他者の存在」があることに気づいた。いわば、私の場合、自分が生きようとする道には、他者の眼を常に意識した生き方が存在していることが明白になった。このことは、肯定的にも否定的にも理解することはできるだろう。いわば、「それは大事なこと」とも言えるし、「人の眼ばかり気にして」とも言えるだろう。

この「人の眼を気にした生き方をしている」という、若干否定的な見方もできる生き方を私は胸をはってしていると言える。私の場合、少なくとも、私が生きていることは、他者の存在によって成り立っているといっているのかも知れない。このことは、まさに他者があってはじめて自分自身が存在しているということであろう。

私のジレンマをレポートとしてまとめるにあたって、思わぬ展開になってしまい、思わぬ言葉を書き残すことになってしまった。これもまた、私の人生の一つのあらわれなのかも知れない。

第10回授業：6月26日～第12回授業：7月10日

この3回は、前期のプログラムをがらりと変えて、学生のやりたいことをやりたいように充分発揮してもらおうプログラムに切り替えた。それは、1年次に経験した主体的に学ぶという学習と「ジレンマ・プログラム」はずいぶん違っておしつけられているプログラムのように感じるという学生からのフィードバックをもらったり、また、何か自分たちで企画して思いっきり身体を動かしたり、25期生全体で何かやる企画を実施したいという積極的な声も聴かれたので、それを実現することにした。準備期間は長く取れなかったが、第11回は、体育館で116人大長縄大会&ドッジボール大会が開かれた。また第12回は、学生が創り出したさまざまなお互いを知り合ったり、チーム（指導生グループ）対抗のゲームを楽しんだ。

2年前期のレポート課題も、基本的には1年次と同じように、出会いカードの交換を行い、そのメッセージカードをもとに、「My Map」を作成し、①“私のあるいた道”、②今期のねらいをふまえ“形のない私の宝物”を語ってもらった。レポートの内容は、授業中はジレンマのプログラムに対して否定的な意見が多く聞かれていたのであるが、前期を終了する頃には、さまざまな形でジレンマのプログラムが消化されており、自分と社会との問題もずいぶん語られていたのが印象的であった。

1998年度（2年次）後期（表4参照）

2年事項期のねらいは、「私の中の社会」からもっと大きな拡がり求めて、「人と自然と、地球に生きる～私たちのNinkan BIBLE～宝物をさがして～」というねらいを新しく付け加え、2年間のまとめとこれからに向けてのプログラムづくりを行った。

第1回授業：9月25日

「夏の思い出を語る」と題して、学生生活最後になる夏休みに体験したことを仲間5、6人で分かち合った。そして、それぞれのグループの代表が、グループで話し合われた「夏の思い出」の体験を全体に報告し合って、これから後期に向けての学びの準備をした。

第2回授業：10月9日

ニンカンの新スタッフとして、米国留学から帰国しニンカン卒業生でもある川浦佐知子（7期生）が登場し、ニンカンスタッフとしての抱負を述べた。「人と自然と地球に生きる」というねらいの説明とあわせて、映画「ガイア・シンフォニー第一番」を見た。そして、11月4日（水）は、11月6日（金）の授業と振り替えて映画「ガイア・シンフォニー第三番」を見ることを予告した。

第3回授業：10月9日～第5回授業：10月23日

3回に分けて、5人の教員が、①人と組織（星野）、②からだを生きる（グラバア）、③人関用語をおさらいする（津村）、④自然を詩作する（中野）、⑤Deep Ecology（川浦）のワークショップを開き、学生が興味あるワークショップに参加する形で授業を展開した。これは、かなり学生の興味や関心を満たす授業になったようである。

第6回授業：10月30日

「展望台から見てみれば」というタイトルで、KJカードと画用紙を用いて、

今まで歩んできた人間関係科での二年間を概観し、「私の内的風景」を表現し、それを近くの数名と分かち合った。

第7回授業：11月4日

南山講堂で、映画「ガイア・シンフォニー第三番」を鑑賞した。

第8回授業：11月20日～第12回授業：12月18日

2年間の人間関係原論の授業をどのように終わろうとするのか、また学生一人ひとりのこれから生きていくことに向けてどのように準備をするのか、スタッフ・ミーティングではいろいろ討議をしたが、結果として、1年次の後期最後に行った「作詞・作曲」に再度、挑戦することで、人間関係原論を締めくくることにした。1年次の時と違って、創作グループは、自分たちが主体的にこの2年間共に過ごしてきた仲間たちで形成し、2年間の想いを一人ひとり語り、その後自分たちの言葉として作詞・作曲として結晶化することを試みた。原論最後の第12回授業では、本当に中身が豊富で内容の濃い、「GENRON Final CONCERT」を行うことができた。

また、最後のレポート課題も、これまでと一貫して、① “私のあるいた道” (どのように自分・相手をいかしいかされたか)、②人関での2年間をふりかえって “形のない私の宝物” を語ることをテーマであった。

さらなる、25期生の創造的活動として、一人ひとりが歩いてきた道のりをA4一枚のケント紙に表現し、116人のそれらと1年次、2年次の作詞・作曲の作品などを載せた「私たちのNinkan BIBLE」づくりに向けて、有志が活躍し、25期生の「形のない宝物」を一つの「形のある宝物」に創造したのである。この25期生は、さまざまなことに自由奔放にチャレンジしながらも、仲間たちとのかかわりも一つひとつ大切にしながら、2年間を生き抜いた期であることは間違いないだろう。まさに「地図のない旅」を歩いてきた116人のすばらしいメンバーがいるのである。そして、これからの彼らのさらなる活躍を期待したい。

最後に、何故私たち人間関係原論スタッフは、詩作することを大切にされたのかを述べ、中野の一つの作品で本論文を締めくくりにする。

心のうちからわき出ることば……詩作すること

ことばは、ただ単に情報伝達の道具にすぎないのではないと思う。ことばは人の内奥から生まれ、他者の内奥へと到達する力を秘めている。心から生まれ心へと伝わっていく力を秘めている。詩のことばは、ことばのこの側面をよく現している。人が心深く感動するとき、そのことばはおのずと、詩人の語りだすことばのように、思いのぎゅっとつまった宝石のひとかけらになって心のうちからわき出してくる。それはいまだ文学形式の整った詩の体裁をとっていないかもしれないが、まぎれもなくその人自身の内実そのものの表出であることに違いはない。人と人のかかわりが、直接に心と心の伝達となる時、そのことばは知らずしらずのうちに詩のことばになってゆくのである。ひとつのことばに込められた力は、人の心を、ひとの生命をいかす力を持っているように感じる。詩のことばは、ひとの感性を開き、心に直接触れるがゆえに、ともに生きる時空を創りだす不思議な力とおおいなる癒しの力をもっている。ことばが持つこの力に信頼することが、人と人、人と自然との共生の時空になくはならないものではないだろうか。

「きみの荷物を背負いましょう」

** I **

君は 一歩 一歩
遠くの嶺に向かって 歩いてゆく
君は背をかがめ、まるで小さいも虫のような
格好で 一歩 一歩
あえぎながら 見えない頂きをめざして 歩いてゆく

重い荷物が肩にくい込む
一足ごとに 荷物が肩にくいこんで
ますます君は ちぢこんでゆく

あと 一歩 あと一歩

今は ただ 越えなければ ならない
山の数々 谷の数々

気の遠くなる つらさの数々ばかりが
心に のしかかる
やさしい緑の樹々の葉も
足許の可憐な野花たちも
心はずませる鳥たちの声も
汗まみれの頬をなでて過ぎてゆく
風も、
君の足の歩みを支える土も石も、
君の歩みを見つめる青空も
君との対話を楽しみにしていた
すべてのものが

ただ ただ なつかしく うらめしく
悲しく 心をすり抜けてゆく
夢が 思いが 意識が 遠のいてゆく

*** II ***

——思いもかけないこと

後ろから 見知らぬ 声がする
「きみの荷物を背負いましょう」
見知らぬ誰かが君の荷を負う

軽い一歩 信じられぬほど
軽い一歩
からだが一足ごとに 大きくなってゆく
目にとびこんでくる 樹々の緑
はなやぎに踊る 野花たち
空の青さが心にしみ込んでくる
風に乗って 鳥たちと歌い交す

歩く楽しさがわかる
語り合う楽しさがわかる

君は 一足ごとに大きくなってゆく

——思いもかけないこと

君の前に行く君の荷を負う誰かが
小さくなってゆく
一歩 また 一歩
背がちぢこまり まるでいも虫のように
一歩ずつ 小さくなってゆく
悲しさが つらさが その背に
くいこんでゆく

*** III ***

あと一歩 あと 一歩したら
声をかけよう
あと一歩 あと一歩したら
言いだそう
「あなたの荷物を 背負いましょう」と

その間にも 君の誰かは
一足ごとに ちぢこんで
あえぎのごとに ちぢこんで
今はもう 目の前にいることさえも
見えなくなってゆく

君の 喉に つまった あの声も
消えてゆく
楽しさも 思いも 記憶も 遠のいてゆく
心が消える

その時 君の誰かも視野から消えた

***** IV *****

——ただひとつ残されたもの

目の前に行く人に 言うはずだった あのことは

「君の荷物を背負いましょう」

奇妙な からだの 軽さの中で
心にずっしり ひとつの 重荷を負う

そこから ひとつの 問いが立ち上がる

——「愛すること」

目の前を きみの荷物を背負って歩く
あの人
あの人
きみが踏みながら歩いた
あの人
あの人
思いもかけなかった あの人
呼びかけのことば
「きみの 荷物を 背負いましょう」

記憶を たどり たどり たどって
君の中に ひとつの思いが 立ち上がる

「ひとを愛したい」

1998.4.12 イエス・キリストの復活を記念する日
(中野 清)

* 原論Ⅱ98.5.1「ジレンマをさぐる」導入のために朗読

表 3

【前期全日程：1998前期金曜 I II at No.21】原論 II (担当) 星野ケウジ・津村・中野

98.07.17

1998年度・人間関係原論 II (前期)

【ねらい】・116人のメンバーと出会う。

- ・わたしをいかす、相手をいかす。
- ・「私の中の社会」を探検する
- つながりのジレンマ、つながりの力 を求めて —

出欠ルール：《選別》開始後10:15までに来た場合、3回が欠席1回。《欠席》前期2回="I"、4回="D" (過年は倍數)

1	4月10日	*「とにかく集まれ」No.21 ●「とにかくニカンPART III」準備：メッセージカード作り ●「FW相談会」準備：看板作り・実施
2	4月17日	*入団12年合同初めアップ ●「とにかくニカンPART III」 ●「自分ホスター」 ●「出し物」 ●メッセージカード・ワラシ ●2:30人で南見・秋中ツアー 昼食

4月24日 【人トレC合宿 4/20(月)~25(土)】

3	5月1日	《私の中の社会》「私のジレンマをさぐる」1：●「私が今抱えるジレンマは？」導入（原論IIのねらい・出欠等）→ワラシのねらいと流れ→4人グループ・個人記入・分ち合い
4	5月8日	《私の中の社会》「私のジレンマをさぐる」2：●「私が今抱えるジレンマは？」Part II もらって書き出す。重要度ほか、違う領域からワラシを選ぶ。「私のワラシ」を削る。分ち合い
5	5月15日	《私の中の社会》「私のジレンマを育てる」1：●「栄養素を集めよう」→ワラシの明確化（3人組で）→新聞から栄養素をピックアップ
6	5月22日	《私の中の社会》「私のジレンマを育てる」2：●「離手を出そう」作業のメモリアル前回チームで、順次各人の新聞ワラシを分ちし、島にワラシ→離手にする。再命名
7	5月29日	《私の中の社会》「つながるジレンマ」1：●「ワラシづくり」離手完成。命名。離手をワラシ選ぶ。更に1つ●「2週間有機体形成」ATRを見る。全員輪になって発表。細胞形成。*地上課題

6月5日 【人トレA合宿 6/3(月)~6(土)】

8	6月12日	「ジレンマから立ち上がる」●「ジレンマ・リポート」わかち合い。3人グループ ●「ジレンマからの脱出」前期後半のワラシづくり。スタミ報告。全員で和風アイデア出し
9	6月19日	●「静かなときを過ごす」●「ワラシの語り」ワラシのジレンマ・リポートより ●「だからリラックス」シアターでワラシ・リポート。シアターファンタジー
10	6月26日	「人間まつりの準備」●指原ワラシ100人分に分かれて3種のワラシに分かれる。企画を練る。代表者会議でワラシ大調整。実施準備
11	7月3日	学生企画「人間まつり」からかき出す。3日体合宿●夜組大会。トータルレポート作成
12	7月10日	学生企画「人間まつり」2、イベントいよいよ●「おちやうと」おちやうとをなまねして。田原1大寺で。人間ビジョン。体の魂からリラックス。いい音楽聴いて。めい想
13	7月17日	「前期をさぐる」●「出会いカード交換」導入（全日程表配布）。*期末リポート課題提示。出会いカードの交換（MSMapに取付かかす）

期末レポート課題— 【提出〆切】7月29日（水）16:00

My Map その3 を完成して、1「私のあるいた道」、
2 今期のねらいをふまえて「形のない私の宝物」、を語る

*表紙（タイトル・番号・氏名）をつける 【形態】B5版（横罫）→用紙またはワラシ

【提出物】①My Map その3、②リポート 【提出先】人間関係科事務室

【注意】My Map その1、My Map その2 も、後期に使う予定ですから大切に保管しておいてください

表 4

【後期スケジュール：1998後期金曜 I II at No.21】原論 II (担当) 星野ケウジ・津村・中野・川浦

98.12.18

人間関係原論 II : 「人間関係」の原点をさぐる

- 【ねらい】・117人のメンバーと出会う。
- ・わたしをいかす、相手をいかす。
 - ・人と自然と、地球に生きる。
 - ～ 私たちのNinkan BIBLE ~ 宝物をさがして ~

出欠ルール：《選別》開始後10:15までに来た場合、3回が欠席1回。《欠席》過年4回="I"、過年8回="D"

1	9月25日	「夏の思い出を語る」はじめに（前期成績・出欠について）／「夏の思い出を語る」15~6人で話す。代表が全員の前に報告。合間にイベント／これからに向けて（スタミ報告）
2	10月2日	「人と自然と地球に生きる」川浦登場／導入前半ワラシ発表。映画「ガイヤンフォニー」第1巻を見る。シアター/次週ワラシ発表。WS希望調査
3	10月9日	「ワークショップ体験その1」5つのWSに分かれて…（星野）人と組織（グラ）からたを生きる。【津村】人間用語をおさらいする。【中野】自然を詩化する。【川浦】Deep Ecology
4	10月16日	「ワークショップ体験その2」5つのWSに分かれて…（星野）人と組織（グラ）からたを生きる。【津村】人間用語をおさらいする。【中野】自然を詩化する。【川浦】Deep Ecology
5	10月23日	「ワークショップ体験その3」5つのWSに分かれて…（星野）人と組織（グラ）からたを生きる。【津村】人間用語をおさらいする。【中野】自然を詩化する。【川浦】Deep Ecology
6	10月30日	「展望台から見てみれば」→自分の内的風景「解説」→「私の内的風景」→「解説」→カードづくり。両用紙で風景づくり。6人でシアター。☆おちやうとリポート課題提示
7	11月4日 (水)	【11/6の授業と振替】南山講堂で、映画「ガイヤンフォニー」第3巻を見る

11月13日 【人トレD合宿 11/9(月)~14(土)】

8	11月20日	「人間を救うPart I」私たちのNinkan BIBLE。宝物をさがして。出会いカード交換。導入。自分たちでグループ（5~6人）／グループ活動（1）
9	11月27日	「人間を救うPart II」☆私の人間用語・星野篇／再び人間関係についてQ&A ／グループ活動（2）／編集会議
10	12月4日	「人間を救うPart III」☆私の人間用語・津村篇／人間Bibleと我々のねらいについて ／グループ活動（3）／編集会議 ☆「歌の粗原稿」を提出する
11	12月11日	「人間を救うPart IV」☆私の人間用語・中野篇／グループ活動（4）／編集会議 *「歌の正式原稿」を「人間Bible」の個人ページ原稿を提出する
12	12月18日	「人間を救うPart V」★発表会 ***** GENRON Final CONCERT *****

冬休み 12/23(水)~1/7(木)

0	1月8日	人間関係トレーニングB (学内1)
---	------	-------------------

1月15日 【祝日=成人の日】

0	1月22日 (試験週)	人間関係トレーニングB (学内2)
---	-------------	-------------------

期末レポート課題— 【提出〆切】1月29日（金）16:00

My Map その4 を作成して、1「私のあるいた道」（どのように自分・相手をいかし
かされたか）、2 人間での2年間をふりかえって「形のない私の宝物」、を語る

*表紙（タイトル・番号・氏名）をつける 【形態】B5版（横罫）→用紙またはワラシ

【提出物】①My Map その4、②リポート 【提出先】人間関係科事務室